第三章　法　要

報恩講　32
春季彼岸会 並 降誕会　45
秋季彼岸会 並 永代経　47
除夜の鐘と修正会　50
法要講師一覧表　51

報恩講

勝福寺の報恩講は昔から一月末に厳修していました。十七世住職の時代は一月二十五日から二十八日の四日間でしたが、知道の代になってからは、ご門徒の多くが勤めに出るようになったこともあり、参詣や当番のことを考えて一月末の金・土・日の三日間にしました。

報恩講を迎えるにあたっては、三日前に「おみがき・お華束つき・お掃除」をし、二日前に「お華束盛り」と「お華立て」をします。

「お斎」は、報恩講の初日に、お煮しめなどを作っておき、二日目と三日目に粕汁や卯の花寿司などを作って参詣者にめしあがって頂きます。

「おみがき・お華束つき・お掃除」は全門徒に呼びかけ、「お華立て」はお華の心得のある方に、「お華束盛り」は総代さんにお願いしてきました。「お斎」作りは当番地区の人を中心に、婦人会の方にも手伝ってもらっています。

こうした報恩講の様子を「響流」や「ひびき」によって振りかえってみます。

平成元（一九八九）年

睡から覚める機縁を求めて

佐々木　孝司（山本・69才）

先哲は、「睡から覚めたらんほどに念仏し給え」と諭されたと聞きました。

平素はよしなし事に紛れて、ともすれば「生きる心」を忘れがちになる凡夫ですが、報恩講の座に連なることの意義を省みながら、荘重な勤行に会い、深奥な法話を聞いて、眠りから覚める機縁とし、念仏の場に会うことのできた悦びを味わっています。

お参りしてくる同朋の方々が本当にいい表情をしているのに驚かされました。ましてや、お手伝いに出仕されている方々に至っては尚更のことです。ただ、ひたすらに己を空しうして愚痴に還り、聞法の場にあることの悦びの表情だと思いました。

「仏法は聴聞にきわまる」（蓮如上人）のだそうです。仲々に容易ではない「自己脱却」ですが、これからも、つとめて、念仏の場を重ねていきたいと思います。

（「響流」6号）

御伝鈔を拝聴す

外園　美子（常徳・68才）

御正忌には毎年お参りさせて頂いておりましたが、昨年末から体調をこわし、初日はお参りができず、終日気持が落ち着きませんでした。二十六日は少しでもご加勢が出来たらと思って、朝からお参りをし、お日中の御法話を聴聞させて頂く事が出来ました。

二十七日のお逮夜は、蝋燭のお灯りで荘厳した中で御伝鈔の拝読があり、拝聴するにただ感慨無量でした。親鸞聖人のご生涯は艱難辛苦の日々で、御修行の御苦労が御教を通して教えられました。南無阿弥陀仏とお念仏申しながら生きてゆく、そこに本当に尊い、人間生活のなかでのお導きがあるのではないかと思っています。

（「響流」6号）

何をご本尊として生きるか

向野　順子（両川・50才）

毎日をあたふたと過ごしがちですが、ふとした仏縁で報恩講二日目の夜、お参りさせていただくことができ、主人ともども喜びあいました。

その夜のお話は、「何をご本尊として生きていますか」との問いです。布教師の先生は中津の細川静照先生でした。その瞬間ドキッとし

ました。自分は何を求めて生きているのか。まず健康、いや子供のこと…と、はてしなく追い求めて苦労している。それが生きている証かもしれない。しかし、それは果てしなく続く…。先生が「人間、誰も同じことですよ」とおっしゃったので、自分も変わらないと、少しばかり安堵したのですが、しかしそれらのことは限界もあり、又はかないものでもある。

それでは安心を決めて、ただ南無阿弥陀仏をとなえれば、ご本尊に近づけるのであろうか。その日、私はそのように承ったのですが、しかしその教えを身に着けて日々実践していくことの難しい自分に気が付くのです…。

ともかく、お若いご住職、坊守様の第一回目の御正忌報恩講のおつとめに、感激ひとしおのものを感じ入りました。（「響流」6号）

平成三年（一九九一年）

ご恩のわかる身

渡辺　ミツル（上町）

今年の報恩講も先日、無事に終りました。毎年お迎えする有難いご縁でありますが、今年もご門徒の皆さんと共に、お参りやお手伝いをさせてもらい、細々ながらも報恩を味わう機会に逢わせてもらった事を有難いことだと思っています。

皆さんが心を込めて磨いた仏具や、若奥様の立花（りっか）などキラキラ輝く御仏前には心をうたれました。

本年は、遠い石川県から松本梶丸先生のお出をいただき、本当に有難いお話しでございました。本堂いっぱいの参詣者を見た途端、思わず有難涙が出ました。

先生のお話しはやさしく解りやすく本当に引き寄せられる思いがすると、みんな喜んでいたようであります。「人間に生まれて報恩を知らぬ者は、人間でなく木石である」と言われましたが、自分も本当に御恩を忘れどおしの生活を送っているなぁと、恥ずかしく思いました。

有り難いことには、今年からは自宅での報恩講をつとめてくれることになりました。せいぜい御恩のわかる身になりたいと思っています。（「響流」24号）

平成九年（一九九七年）

「南無阿弥陀仏ですわ」

山本　ヒロ子（山本）

正遠先生とご縁を戴き、お話する機会を得たある日、「私のお念仏は『助けたまえ、南無阿弥陀仏』だから駄目です」と言ったら、先生は、「それでいいのです。お念仏がお出ましになればいいのです」とおっしゃいましたので、なにかしら自信が出ました。それから度々、先生の御法話を戴きましたが、いつも「南無阿弥陀仏ですわ」とおっしゃっておられました。

お蔭で夫婦でブツブツ文句を言っていても「南無阿弥陀仏」といって、最近では少しずつお念仏で納められるようになりました。

これからも、先生に書いて戴いた「南無阿弥陀仏」のお名号を拝むたびに、先生の面影が浮かび、私にいつまでもお念仏を送り続けてくださることでしょう。

お与えのままに念仏申さんと
　摂取の大悲学びて思う
正遠師ただ念仏と言われしが
　不足の多きこの身を恥じる
如来より賜わりたりし仕事なり
　道の草刈る心地よき朝
帰るべき道をしっかりたしかめよ
　聞法重ね歩みつづけん
わがいのち一息までもままならず
　弥陀にまかせて難度海を行く

（「響流」40号）

お磨（みが）き・お華束（けそく）・お華（はな）・お斎（とき）
―お手伝いご苦労さま―

藤谷　純子

皆さん、今年の報恩講にお参り下さいましたか。

報恩講は真宗寺院にとって一番大切なおつと

まりとして受け継がれてきました。恩徳讃にある「如来大悲の恩徳」「師主知識（真宗のみ教えを明らかにして伝えて下さった高僧方）の恩徳」を憶い報謝していく生活を確認し合う意義のある法要なのでしょうが、なかなかその心になれないですね。それでも、お手次ぎ寺の報恩講ということで、それぞれに力を尽くして今日まで勤められてきている報恩講の様子を記してみようと思います。

まず一月二十二日、前の晩より雪が降り出し、起きてみると一面の銀世界。午前中は無理だと決断してあわてて電話をしたが行き違い、まず佐々木強さん、そして常徳から三人、大塚から三人と雪の中を歩いてみえ、折角だからと、お磨きに取り掛かりました

午後は総勢四十四名で、お華束つきとお磨きをして三時半終了。寒い中ご苦労さまでした。

翌二十三日はお華立てとお華束盛り。お華は向野順子さんと中園令子さんと私で。お華束盛りは総代さんの中園静雄さん、佐々木孝司さん、山本裕敬さん、小川春海さん、吉松忠徳さん、矢次慶吾さんが例年通り慣れた手つきで美しく盛り上げて下さいました。

二十五日よりいよいよ報恩講開始。台所は、お斎のお煮しめ（椎茸、人参、里芋、昆布、油揚、こんにゃく）を作る。当番は院内地区で、遠路バスに乗ったり、お勤めを休んだりして参加して下さいました。地元の渡辺ミツルさん、春子さんのリードで和気あいあいの雰囲気が味をぐんと引き立てました。材料の里芋、人参、ネギ、大根、漬物もたくさん頂戴いたしました。多くの方の心のこもったごちそうが、この報恩講への何よりのおもてなしになったかと感謝しております。

最後に一言。台所では多くの方に食べていただこうと思い、毎年、百五十人分用意しますが、余ります。年に一度は勝福寺のお斎について下さいますよう、それが台所方のお願いです。ご家族連れでおなおり下さい。（「響流」40号）

平成十（一九九八）年

先生方にお会いして

宇野　美智子（石田）

報恩講のご案内を頂いた翌日、坊守さんから、お寺のお手伝いを頼まれました。ご法話をなさる福島先生やご法中のお茶の接待です。

長い間お寺のお世話をなさっている山本さんや幡手さんがご一緒だったので、気持ちを楽にして、先生にお会いすることが出来ました。

蓮如上人の有り難いご法話にふれているうちに、矛盾にみちた愚かな自分ですが、お念仏申す生活の中で本当の自分が見いだせるかも知れない、と感じました。

春の彼岸会では、藤原利枝先生にお会いすることが出来ました。二日間、先生のお話をお聞きして、もう少し先生とお話をしたいと思い、夜の聞法会にも参加させて頂きました。はじめは一時間ぐらいで帰る予定でしたが、つい最後までお話し合いの場にいました。

藤原先生は、「隣の人が悪いのではない、子供がだらしないのではない、すべては自分自身の問題です」とか「みんな同じ仏のいのちをいただいているのですよ」とおっしゃられました。

まだ何もよく分かりませんが、お仏壇のお花を取り替えて「ナンマンダブツ」と掌を合わせていると、心なしか仏さまが微笑んでいるような、私が微笑んでいるような気がしてきます。

南無阿弥陀仏

（「響流50」号）

平成十一（一九九九）年

報恩講に思う

中園　静雄（横町）

今年の報恩講も無事に終わりました。戦乱の世に生を享け、人生の辛酸をなめながら、生きる目処を失った庶民大衆に一縷の光明を与えた祖聖親鸞聖人の教化の業績の偉大さを、今更ながら感嘆の思いで想起しております。

翻って現代の世相に思いをいたす時、形こそ変わって居りますが、政治の腐敗、上層部の道義なき職権の乱用、経済、金融界の汚職、崩壊、青少年の非行、乱行、無造作な殺人行為等々、親鸞聖人の時代を上回る乱世の時代の到来を思わせる末世末法の様相を呈して居ります。

私達日本人は今こそ、再度、真摯に親鸞聖人の教えを学びかえし、時代の風潮に大変革を加えて行かなければ、日本の将来は心細い状態に

なって行く様な気がしてなりません。

（「響流」54号）

蓮如さまへ花ささぐ

渡辺　キヌ子（東新町）

小春日にめぐまれまして今日、二十六日は主人の命日でございます。ご住職様にお参りして頂き、やがてお経が終わり、一服のお茶をさしあげました時に、住職さんより急に「今度の報恩講の感想を一言お願いします」と言われ、私は一寸迷いました。老いて八十七歳の今日ほんとうに迷いました。

しかしよくよく思い返せば、今年もまた有り難いことに、向野先生、岩水先生、池上先生、坊守さん達の仲間に入れて頂き、報恩講のお花を活けさせて頂いたことでした。活けたお花は蓮如さまへお供え頂きました。これもひとえに勝福寺ご住職さま、坊守さまのおかげでございます。どうか残り少ない人生を楽しく温かく支えて下さい。

（「響流」54号）

得がたい友、有り難い教えに逢って

佐々木　キヨ子（山本）

大ぜいの門信徒が多額な浄財を拠出してできあがった立派な本堂にお参りさせて頂きまして、福島先生のお話を聞き、心洗われる報恩講で御座いました。

私達が平素の生活の中で味わう心配ごとや、悩みから逃れ、豊かな心、生きていく道を見出していける場所が勝福寺の本堂でした。そして、その場所は勝福寺に限らず、私達の考え方と力で作り出せるのだということがわかりました。

悩みから抜け出して豊かな心で生きていける世の中を作りたい。そんな世の中は、ひとりひとりの生活が私達の心の持ち方で、どこでも、いつでも作り出せるものだと知りました。

（「響流」54号）

身体の続く限り

渡辺　春子（上町）

早いものですね、月日のたつのは。今年も御正忌のお手伝いをさせていただきました。歳を取ったので出来るかなと思いましたが、皆さんと一緒になって煮物を初日にたきました。皆さんのおかげで早く出来ましたので、やれやれと思い、昼からのお説教に参らせてもらいました。夜もお参りしましたが、人が少なかったので寂しかったです。次の日はたくさんの人でにぎやかにお参りが出来ました。

私もこれからいつまで御正忌にごかせいが出来る事かと思っているのですが、元気でいる限りお手伝いをさせていただきたいと思います。

皆さん有り難うございました。

（「響流」54号）

ほうおんこうのかんそう

藤谷　ゆきこ（四日市南小二年）

わたしはほうおんこうの時、人がいっぱいきたのでうれしかったです。いがらしさんやよこ川さんが、ひさしぶりにきたので、すごくうれしかったです。

わたしも、みんなといっしょにおまいりをしました。みんな大きい声でおまいりをしていました。

ふくしま先生がきたとき、わたしはあそびに行っていました。かえったとき、お母さんから、「先生がおみやげを買ってきてくれたよ。」と言ったので、はしって先生のところにいきました。とてもうれしかったです。

おときでは、おでんが出たりしました。わたしは、ごはんやおまめがすきでした。

ほうはんを食べたとき、わたしはおつゆをかけて、たまごをかけて、あぶらげをかけて、あずきをかけて食べました。おいしかったです。

ほうはんは、まことにいちゃんが大すきで、インフルエンザでも二はい食べました。

ほかのは、あまり、子どもなので食べませんでした。　おわり。

※　法飯は、みじん切りした六種の具をご飯にのせ、熱いだし汁をかけていただく報恩講用の勝福寺家伝のご飯です。

（「響流」54号）

平成十八（二〇〇六）年

この年より、お斎後の休憩時間に素人劇などを行うようになりました。この年のテーマは妙好人の「因幡の源左」で、日替わりで寸劇を行っています。

寸劇「源左の回心」
源左（藤谷知道）
願生寺の御院家（五十嵐務）
照ばーば（岡本照子）
ナレーション（横川久美代）

寸劇「源左の生きた垣根のない世界」
源左（香田紀子）
竹蔵（藤谷純子）
農家の主婦（中山美津子）
牛（藤谷信）
村の子ども（甲斐寛人・甲斐葉月）

寸劇「源左の往生」
源左（五十嵐務）
直次（横川香正）
この（佐藤麗子）

平成十九（二〇〇七）年

（ジャータカ物語）

寸劇「不思議な坊さん」
常不軽菩薩（藤谷知道）
悩める青年（岡本朋之）
ならず者の青年（香田紀子・佐藤麗子・永田睦子）

寸劇「消えない灯り」
釈尊（藤谷純子）
阿難（香田紀子）
村娘（岡本照子・佐藤麗子）
村の子ども
定行沙耶・定行珠奈
榎丸沙映・中園眞帆
吉田尚生・甲斐寛人
甲斐葉月

紙芝居「蜜のしずく」
作・朗読（五十嵐務）
絵（岡本康・香田洋江）

平成二十（二〇〇八）年

寸劇「妙好人―浅原才市」
浅原才市（鍛冶谷榮）
安楽寺住職（五十嵐務）
妻セツ（佐藤冨貴子）
村娘（渡辺末子）

寸劇「六角堂の夢告」
親鸞聖人（藤谷知道）
行者（林正道）
赤山禅院の女性（向野順子）
救世観音（中園れい子）

仏法漫談「灯台もと暗し」
寺内（てらのうち）純麿（すみまろ）（藤谷純子）
寺外（てらのそと）愛麿（あいまろ）（奥永愛子）

平成二十一（二〇〇九）年

詩吟「親鸞聖人雪中布教の図に題す」
渡辺敏晴

詩吟「居多が浜（こたがはま）」
國廣弘子・外園ミツエ
渡辺末子・渡辺勝子
大迫十四子・渡辺道枝
二渡乙香・藤谷純子

平成二十二（二〇一〇）年

気持ち新たに

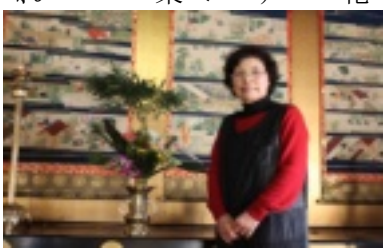
佐々木ノリ子（山本）

坊守さんから「一緒にお花を活けていただけませんか」と声をかけられたとき、私みたいなものでいいのかと迷いましたが、今ではみんなと楽しくお花を活けております。

本堂でお花を活けていると、老院さんがやってきて「これで勝福寺も安心や」と言いながら「ここは、こうしたらいい」とアドバイスをしてくれたりします。そんなことも楽しみの一つになっています。お花は、その日の材料や気持ちで、毎回違うものに活かっていきます。いよいよ出来上がり、ご仏前にお供えできたとき、これで仏様へのご奉仕ができたと、嬉しくなります。

これまで、今日はお寺のお花を活けるのだと、服を着替え気持ちを新しくして活けてきました。その気持ちを忘れずに、身体の許す限りお花を活けさせて頂こうと思っています。

（「響流」72号）

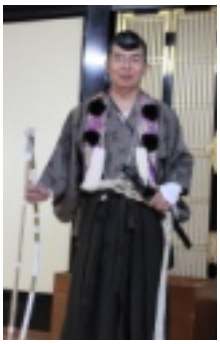


平成二十三（二〇一一）年

寸劇「山伏弁円の回心」

Aグループ
親鸞聖人（佐野明弘）　弁円（外園晃）
恵信（奥永益代）
村人（岡本朋之・定行宏和・吉松妙子・後藤アヤメ）

Bグループ
親鸞聖人（渡辺和義）　弁円（藤谷知道）
恵信（中園志津子）　村人（松本順・渡辺輝幸・渡辺美佐子・長尾正子）



舞踊

「なつかしき稲田ご草庵」

親鸞聖人（金丸フジエ）
恵信尼（藤谷純子）

山伏「弁円」を演じて

外園　晃（常徳）

住職から、二〇一一年度の勝福寺報恩講において寸劇「山伏弁円の回心」の弁円役をというご依頼を受けました。弁円の何たるやも知らなかったのですが、お役に立てればと、うっかり引き受けてしまいました。

まず、なぜ「弁円の改心」でなくて「回心」なのか考え込んでしまいました。「この世は弱肉強食の世界であり」「負けたくない、勝たねばならぬ」（脚本より）。そういう世界から脱し、人間の元の姿に回帰すべきである。それが「回心」ということであり、人間性の回復ということなのだろうかと、勝手に思ってみたりしました。「改心」という言葉にはなんとなく抵抗がありますが、「回心」には人間に対する優しい愛情が溢れているような気がします。

私は中々台詞が覚えられず、沈み込んでしまうことしばしばでした。台詞を覚えることだけに一生懸命で、物語として内容を理解しなかったからだと気付きました。「心ここにあらざれば」です。本番で「弁円」と言うべきところを「親鸞」と言ってしまい落ち込んでいたところ、一緒に演じた皆さんから「大丈夫、自分たちも間違えているよ」と励まされ、元気づけられました。また、一部台詞を方言でユーモラスに演じたことは内容をより身近なものにしたと思います。和気藹々の内に仲間意識も生じ元気を戴いた貴重な体験でした。稚拙な演技で皆さんの足を引っ張りながらもなんとか終えることが出来たのは、仲間の皆さんやお参り頂いた皆さんの寛容さのお陰と思って感謝しています。

親鸞の人間としての大きさと弁円の求道心を深く心に刻むことができましたが、一方で「なほ、頑なるわが心かな」と自分を戒める気持ちも潜んでおります。

（「響流」74号）

お斎

おみがき

小若女さん・腹話術

佐野明弘先生

お華束つき

平成二十六（二〇一四）年

寸劇「自力さんと他力さんの子育て談義」

自力さん（松本知代）　まけるな君（岡本朋之）

他力さん（渡辺玲子）　ナムちゃん（中園れい子）

仏教讃歌

歌（宇佐組合唱団・コールハイマート）

指揮（此松清美）　ピアノ（矢次久美子）

平成二十七（二〇一五）年

一心くん

鍵主良敬先生

朝のミーティング

吉四六さん

お華束の型抜き

平成二十八（二〇一六）年

お煮〆なら、おまかせ！

同朋唱和のおつとめ

久方ぶりの雪の報恩講

いくつ出来たかな？

平成二十九（二〇一七）年

なんだろうな の まこっちゃん

二〇一七年の報恩講では久方ぶりに寸劇がありました。若い二人が、お念仏の心を尋ねていく、笑いあり、問いあり、教えあり、の傑作でした。誌上で再現してみましょう。

風「ナンマンダブって、何の意味あるの？」
信「え、何だろう？
皆に聞いてみようか」

香田「念仏したら、煩悩もひっこみ、わがままもなくなるのよ」
佐藤「違うでしょう。煩悩いっぱい、わがままな自分と知らされるのでしょう」
信「？」

外国からの旅行者「日本の若者、無宗教と言いますね。ラブ&ピース。宗教、大切ですね。」

女性住職「ナンマンダブって、お・も・て・な・し・の心！」

住職「私は仏さまのお慈悲の中、と気づいた慶びよ」

おばあちゃん「昔から、皆が言っているから申すのよ」

親鸞聖人「法然上人のお言葉や姿が忘れられない」

はじめてのお寺の劇

村田　風

小学生の時以来の劇でした。まず台本を書くのに全く手が進まず、困りました。けれども、今のまんまで書くと、ああいった内容になっていきました。

私自身、仏教の学校で勉強したからといって、お寺の法務のお手伝いをしているからといって、仏教や宗教に対して、自分自身の中に違和感や疑問が起こらないなんてことはありません。「なんで私はなんまんだぶつと称えるのだろう」「称えることが素直にできないのだろう」と、そういった思いが出てきます。その納得というのはなかなか難しいですが、お参りに出向いてご門徒さんのお念仏を称える声を聞いて、私が安心していたりするのです。

この劇では、出演していただいた皆さんの自作自演がとてもすばらしくて、それにとても助けられました。また見てくれた方も楽しく盛り立ててくれて、それに突き動かされるようでした。おかげで私はたのしい時間を過ごさせてもらったように思います。

平成三十（二〇一八年）

迫力と慈愛に溢れた歌声

同朋唱和のおつとめ

「どれ、どれ、味はいかがかな？」

本多沙代さん「ソレアード」

ご講師のお話に聞き入る

180人分の盛り付けの最中

お齊づくりの楽しさ

上条佳代
（杵築市山香町）

十六年前まで四日市上町で暮らしていましたので、ご住職様より「今年のお齊づくりに参加しませんか」と、お誘いを頂き、久し振りに二日間お手伝いさせて頂きました。

初日、作業前、自己紹介の折に風さんが「藤谷風になりました」と言われ、皆様が望まれていた事だけに、一瞬にして和やかな雰囲気になりました。

毎年お手伝いされている麻生民子さん、渡辺美佐子さん、香田紀子さん、婦人会長の松尾さんを中心にお煮しめの下準備に取りかかり、百八十食分を数えながら流れ作業が進み、大きな鍋から良い匂いが漂い出し、手順良く午前中で終了しました。

二日目は卯の花の酢和え、大根なます、カス汁作りなどで、どのお料理も目分量の匙加減なのに、その絶妙さに感服いたしました。若い風さんに徐々に味付けを覚えてもらいたいとの思いが端々に感じられ、また何事にもお優しい純子さんの目差しに皆様、本当に楽しそうなご様子で、このお齊づくりがこれからも続けられて行くことを心から願っております。

平成三十一（二〇一九）年

お飾りも終え、あとは皆さんの参詣を待つばかり

お花立て。何年経っても悪戦苦闘です。

今年は若い人も参加してくれました

今年のお飾りをしてくださった皆さん。

お華束盛り。思うようにはいきませんね。

棒で伸ばし、大小二つ、丸く型抜きします

初日の朝は雪でした。当番の皆さん、ご苦労さま。

包丁はトントン、口はペチャクチャ.ああ、楽し!

平野喜之先生　高校生も熱心に聞いてくれました。

朝のミーティング。まずは当番の方の自己紹介。

東九州龍谷高校
ナムナムガールズ

二〇一九年の報恩講を振り返って

藤谷　純子

お寺の報恩講を勤めることができて、ホッとしています。当番地区であった皆さんには大変ご苦労様でした。

報恩講は、お寺にとって一番力の入るお勤まりです。なぜかというと、恩徳讃（おんどくさん）に歌うように、阿弥陀如来様のご恩、大悲のお念仏を教え導いてくださった人々のご恩に謝し、新たにはりのある生活を始めようとする元気をいただく法要だからです。

と言っても、難しいことではありません。ご法話やナムナムガールの歌やダンスもよかったけれど、報恩講の目玉は、なんと言ってもおいしいお斎にあります。今年のお味はいかがでしたか？ 当番は、寺山、新町、東新町、中津地区でした。日ごろはお寺に参らない人も、仕事などをやりくりして参加してくださいました。若い人が入ってくださるととても元気が出てきます。新しい人の感想を聞きましたのでご紹介します。

＊久しぶりだったけど、皆が協力的でやりやすかったです。みなさんとってもにぎやかでしたね。

＊メニューは評判いいですね。先輩方の傍で、どうやるのか見られてよかったです。でも早くって、あっという間にできてしまうので、おぼえられません。よく習いたいです。

＊いろいろな人の顔が見られて、新鮮な出会いの場所でした。雰囲気がよかったですよ。

＊慣れている人がそれぞれの処（ところ）にいて、よくお世話してくださったので、とてもしやすかった。長い伝統があって引き継がれてきてるのだなと感じました。楽しかったです。

＊初めてだったので難しかったけど、皆に優しく教えてもらいながらできました。大変だったけど、おもしろかったです。

慣れない台所でのお斎作りやお給仕など、くたびれたことでしょう。ご苦労様でした。

長年お斎作りを荷負って下さった麻生さん、美佐子さん、そして香田さんから「もう世代交代したい」との声も聞きましたが、「坐って教えてくれるだけでもいいから、来られる間はお願いします」と、お頼みしました。

平成31年（2019年）報恩講ご案内

勝福寺　報恩講

1月25日（金）　日中（にっちゅう）　13時　逮夜（たいや）　19：30

法話　**住職**

講題　**「親鸞さま　なぜお念仏ななの？」**

1月26日（土）　日中　13時　逮夜　19：30

27日（日）　日中　13時

法話　**平野喜之先生**　（石川県・浄専寺住職）

講題　**「大悲を生きる」**

＊26・27日、12時よりお斎（とき）があります。

皆さん、お揃いでどうぞ。

＊26日、お斎の後、東九州龍谷高校の学生グループ「ナムナムガールズ」による歌と踊りがあります。お楽しみに。

＊今年の当番地区は**本町、西本町、寺山、新町、東新町、中津**です。よろしくお願いします。

＊おみがき・おけそくつきは22日（火）午後一時からです。皆さんのご協力お願いします。

＊御法礼は、例年通り、三千五百円となりました。

よろしくお願いします。

ご案内

明暗・苦楽・悲喜こもごもだった一年を過ごして、新しい年を迎えました。

いかがお過ごしでしょうか。

いよいよ勝福寺の報恩講が近づいてきました。長い長い間受け継がれて勤められてきた報恩講に、参加させていただきながら思うことですが、普通は自分のしたいこと、自分に得となることができることに喜びをおぼえるのですが、「させていただいて喜ぶ生活」が開かれてくるように思います。みんなで協力して、つながりの中で仕上がる喜びがあります。こうした営みを通して「自分が世に役立っている」ことよりも、多くの人々・食物や・大地や水・空気に至るまで、「無限に支えられている」ことを実感しつつ生きる生活が開かれるのだと思います。

万障繰り合わせて、誘い合わせて、お参り下さい。

平成三十年　報恩講法話

どうしたら仏の国に生まれるか

平野喜之師

何のために生まれてきたんやろ

父ががんの手術をする2、3日前に「わしの人生は、仕事も趣味も充実していた。だけど、わしはこういうことをするために生まれてきたんやろうか。わしは、何のために生まれてきたんやろ」と言ったんです。僕はその時、アンパンマンのマーチの一節を思い出しました。

何のために生まれて
何をして生きるのか
答えられないなんて
そんなのは嫌だ！
何が君の幸せ
何をして喜ぶ
解らないまま終わる
そんなのは嫌だ！

父親が言っていることと全く同じだと思います。その時は、厳粛な感じがして言えなかったけど、父親は自分自身に会いたかったんじゃないでしょうか。私たちは、自分自身に会うために生まれてきたんじゃないかと思います

つぶやき

昨年、友達から浅田正作さんの「つぶやき」という詩を教えてもらいました。

台風の進路がはずれてくれ
ればそれでいい
こんなものが祈る世の中の
安穏（あんのん）とほなんだろうか

この詩を聞いて思い出したのは、杉本さんという友人が言った言葉です。「人身事故で電車が停止したとき、それを知らせる車内放送を聞いて、『ああ、一人の人が死んだというのに、つめたいな』と思った。ところが今日、講師として急いでいるところで人身事故があって電車が停止したら、心の中で『ちぇっ』という声がした。『ああ、僕の心の中にも同じようなつめたいものがあるんやな』と気づいた」と。僕は、聞法生活というのは、出会った言葉によって自分自身の罪にうなずいていく生活だと思います。この「つぶやき」という詩は、いろんな意味で、自分自身の姿というものを照らし出してくれる詩だと思います。

地獄

浅田正作さんに「地獄」という詩があります。

他人の花が赤く見える
あさましや
これがないものねだりの私が
おちる地獄

この詩を読んで嫁さんは、「私もこんな思いをしている。この詩は救いようのない詩だな」と言いました。でも僕は、救いようのない詩じゃないと思います。「他人の花が赤く見える」ことを「あさましい」と思えることはすごいことやと思いますね。

我執の底にある自己

安田先生が「人間は二重底でできている」と言われています。ひとつは「我執」といって、自分の思いさえ満足できればいいという底。もう一つが「自己」と言われる底。僕は京都にある洛南高校の出身なんですが、その校訓にある「自己を尊重せよ」が「仏に帰依せよ」に対応しているということが、長い間、分かりませんでした。しかし、安田先生の話を聞いて、「自己を尊重せよ」とは、我執の底にある「自己」を言っていることに気づきました。

僕らは、どこかで、自分の外側に仏さんをイメージして、その仏さんに手を合わすことが「仏に帰依する」ことだと思ってますね。大谷大学で寮監をしていた時、学生さんから、「仏に帰依せよというが、仏はどこにいますか」と聞かれたことがあります。たとえば、お釈迦さまを見て「仏」だと思えるでしょうか。「老人」としか見えないかもしれませんね。

どうしたら私たちは「仏」と知ることができるのか。安田先生は、この方は「仏」だと知る智慧というものが人間に与えられると。その智慧においては「仏」と「人」は同等であると。「仏」を知る智慧、それは「あさましや」と見えてくる智慧。それが「自己」ということやと思いますね。

「仏に帰依せよ」と「自己を尊重せよ」は一つのことなんですね。だから「あさましや」という声が出ているところに「救い」というものがあるんじゃないかと思いますね。

『歎異抄』第四章で言われている「浄土の慈悲」は、「あさましや」ということを照らし出してくれる光やと思いますね。

浄土からのスタート

浅田正作さんの詩には、はげまされる詩もあります。それが「始まる」という詩です

己の地獄発見
そこから仏法がはじまる
この地獄深くして底なし
ここから真の人生が始まる

本当の自分はどういう身を生きているのかということに気づいて、そこからはじめて人生がスタートしていくんだという詩です。浄土は目標としてあるのじゃなくて、浄土からスタートしていく、ということですね。今日は、「仏の国」という言葉は使っていませんが、「仏の国に生まれる」話になっているんじゃないかと思っています。

（聞書き担当者感想）

自分の思いがあてにならないということを知って、自分の姿を照らしてくれる仏の智慧に出会い、本当の自分に気づいて、そこからはじめて真の人生がスタートしていく。それが「仏の国に生まれる」ことの内容であるとお聞きしました。

南無阿弥陀仏　（釈和敬）

（『ひびき』89号）

春季彼岸会（しゅんきひがんえ）並びに降誕会（ごうたんえ）

四月初旬の二日間にかけて行われる春の法要は、「彼岸会」と、お釈迦さまの誕生を祝う「降誕会」を兼ねてお勤めします。

「彼岸会」の「彼岸（ひがん）」は、仏さまの世界（浄土）を意味します。私たちの生きているこの世界、つまり「此岸（しがん）」に対する言葉です。

「彼岸会」では、この世界が苦悩の絶えない「娑婆」世界になぜなっていくのか、その原因を尋ね、あわせて、煩悩の火の消えた涅槃の世界（彼岸）に生まれ出る道を聴聞します。

また、「彼岸会」に合わせて勤める「降誕会」ですが、お釈迦さまは生まれてすぐ、七歩、歩いて、右手で天を指し、左手で地を指して、「天上天下唯我独尊」と宣言された、と言い伝えられています。この誕生仏に甘茶をおかけして、お釈迦さまの誕生を慶ぶ行事が「降誕会」です。

「春季彼岸会 並 降誕会」の様子を「響流」や「ひびき」によって振りかえってみます。

平成21年（2009年） 谷田暁峯先生と

平成31年春季彼岸会ご案内

春季彼岸会

並びに

降誕会

生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける　（龍樹菩薩和讃）

新聞にも「思ひ知らされたる霧の生死海」とありました。限りあるあやうい時の間を生きている私達。テレビのニュースでも、どれも他人事ではありません。そんな私達を悲しんで南無阿弥陀仏と成られた阿弥陀様がおられます。そのご法話を聞くご縁の法要です。

この度は、多くの若い人々の苦悩と共鳴しながらご自身を生きておられる妙慶さんとの三度目のお出会いです。お誘い合ってお参りくださいますよう、お願い致します。

霊鷲山　勝福寺

【日時】　4月7日（日）昼席（午後1時半）夜席（午後7時半）
　　8日（月）昼席（午後1時半）

【講師】　川村妙慶先生

【講題】　自由に生き、老いる
　　― 世間の枠に囚われない生き方 ―

妙慶先生は『同朋新聞』に「ミカタ ガカワル」という題のコラムを連載しています。
また『持たない暮らしのすすめ―本当の幸せを得るための人生の法則』『いのち輝く365日』など、たくさんの本があります。当日用意しておきますので、手に取ってみてください。

＊3月31日(日)、4月14日(日)午前5時半より、テレビ西日本の【テレビ寺子屋】に出演し、　ご法話されます。早起きされる方はぜひお聞きください。

ご法礼 2000円 ＋ 本山納金（後期分）1000円　合計 3000円　よろしくお願い致します

平成25年 藤本愛吉先生と

平成26年 國田法應先生と

平成28年 川村妙慶先生と

秋季彼岸会（しゅうきひがんえ）並びに永代経

昔は春秋の彼岸会と別に永代経法要が勤まっていましたが、知道が住職を継承した時には彼岸会と合わせて厳修されていました。

秋季彼岸会を厳修する意味は春季彼岸会と同じですので省略します。

永代経法要とは「永代に渡ってお経が読まれる＝法が相続される」ことを願って勤められる法要です。

勝福寺では、平成二十六年より、この一年間に亡くなった門徒の方も追弔して焼香をしています。

御講師については、平成二十一年（二〇〇九年）より、当時、総代会会長だった山本裕敬さんの提言で、住職と坊守がご法話をさせて頂くようになりました。

また、平成二十八年より、お経と法話を中心にした昼と夜の法座をやめて、イベントやバザーを挟んで午前～午後と続く法要に変えました。時代に即応した法要になるよう試行錯誤しているところです。

平成二十二（二〇一〇）年

住職法話

平成二十四（二〇一二）年

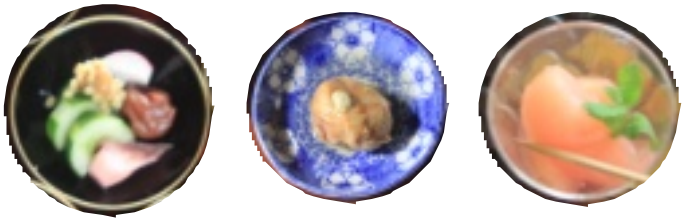
宇佐組合唱団・コールハイマート

婦人会手作りのおやつ（芋もち）

三帰依・導唱

ピアノ（矢次久美子）

平成二十五（二〇一三）年



横川久美代さん手作りの「おひもとき」精進料理

平成二十六（二〇一四）年

坊守・腹話術法話（アッちゃん）

平成29年

秋季彼岸会・永代経法要

2017年

九月二十九日（金）

11時　永代経勤行
（物故者追弔会）
門徒感話（牧本和孝）
ミニ法話（藤谷　信）
12時　お斎（おにぎり・漬け物）
《チャリティ・バザー》
13時　フルート演奏
中村恵子・安達かずみ
13時半　彼岸会勤行
（同朋奉讃式第一）
法話（坊守・腹話術法話）
講題「四苦八苦を超えて」

九月三十日（土）

11時　永代経勤行
（物故者追弔会）
門徒感話（若林範子）
ミニ法話（村田　風）
12時　お斎（おにぎり・漬け物）
《チャリティ・バザー》
13時　書道パフォーマンス
向野理恵
13時半　彼岸会勤行
（同朋奉讃式第一）
法話（住職）
講題「ここが浄土の南無阿弥陀仏」

感話

初日の感話は、四日市小菊町の牧本和孝さん。奥さんの三回忌を終え、なんとなく「空っぽになりたい」と歩き始めたそうで、これまでに九州を縦断、四国をお遍路、昨年からは蓮如上人の御影道中に参加。来年はヨーロッパの巡礼もしたいと。淡々とお話されるお姿は、道を求める行者さんのようでした。

二日目の感話は、柳ヶ浦の若林範子さん。ダンプと正面衝突するような大事故に会いながらも、医者の予告をはるかに超えて回復できたのは、仏法を歓ぶご家庭に育てられ、暗く落ち込まずに、現実を受け止めていく力をもらっていたから、と。感謝と思いやりのたえぬ若林さんでした。

バザー

皆さまのご協力を得て今年もバザーを行うことができました。売上げ金の六九、六七〇円は、台風18号で市内が水没した津久見市で、炊き出しを続けた蓮照寺さんに届けました。
有り難うございました。

イベント

初日は、宇佐市樋田の「樋田郵便局」の中村恵子さんが友人の安達かずみさんとデュオで「コンドルは飛んでいく」など親しみ深い曲からクラシックまで演奏して下さいました。ふだん聞くことのないフルートの音色に、お参りしていた皆が、うっとりと聴き惚れた楽しいひと時でした。

二日目は、院内町の向野理恵さんの書道パフォーマンス。理恵さんは生まれつき心臓が悪く虚弱だったそうです。お母さんはそうした理恵さんを深い愛情をもって見守り続けて下さいました。そのお母さんへの感謝の想いを込めて「命」と「母の歌」の二つを全身全霊で書いて下さいました。

平成30年（2018年）ご案内

秋季彼岸会 並 永代経 ご案内

猛暑の中、台風や地震など災害つづきの夏もようやく過ぎ、秋を迎えておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。畦道に彼岸花の花茎が見え始めると、勝福寺の彼岸会も近づいてきます。

さて、今年二月より、「**親鸞さま なぜお念仏なの？ 出会おう 語ろう 今ここで**」というテーマをかかげて、「親鸞聖人七百五十回御遠忌」お待ち受け聞法会を月一回開いてきました。そこで、人間に生まれ人間として生きることを成就していく道を、親鸞聖人のご生涯やお念仏を敷ばれた人々に学んできました。

今度の彼岸会におきましても、「**親鸞さま なぜお念仏なの？**」をテーマにいただいて、感話、ミニ法話、法話をお願いしております。

稲もだいぶ実りつつあります。私達の人生においても、空しく終わらない実りが願われることです。

被災地助け合いのバザーもあります。ご協力よろしくお願いいたします。

お誘い合わせてお参りください。

記

九月二十八日（金）

十一時　永代経（物故者追弔会）
　　門徒感話（中園尚武さん）
　　ミニ法話（村田　風）
十二時　お斎（オニギリ・漬け物）
　　チャリティー・バザー
　　手品　湯口景右さん
十三時半　勤行（同朋奉讃式第一）
　　法話（坊守）

九月二十九日（土）

十一時　永代経（物故者追弔会）
　　門徒感話（岡本照子さん）
　　ミニ法話（藤谷　信）
十二時　お斎（オニギリ・漬け物）
　　チャリティー・バザー
　　日本舞踊　後藤美代子さん他
十三時半　勤行（同朋奉讃式第一）
　　法話（住職）

＊今年も、**被災地支援のバザー**をしますので、家にある不要品やリサイクル用品のご協力をお願いします。**九月二十五日**までに、総代さんか婦人会員、またはお寺までお届けください。

＊お参りは、日程の一部でも結構です。また、お子さんにはお接待菓子を用意しておりますので、お子さんも誘ってお参りください。

平成三十年九月二十日

門信徒各位

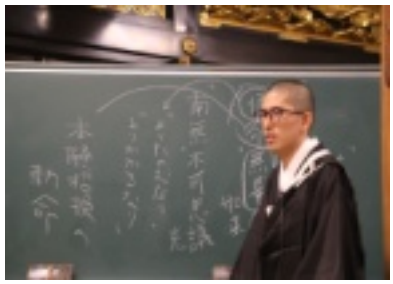
響流山勝福寺

《追伸》 御法礼
本山納金（前期分）　千円
　　二千円
合計三千円

よろしくお願いします。

キム花夏（はな）優夏（ゆな）姉妹

婦人会・お斎の用意



ミニ法話 藤谷 信

日本舞踊・後藤美代子さん他

バザー 50,290円の売上げでした

手品 湯口景右さん

除夜の鐘

勝福寺にも戦前には鐘楼がありましたが、戦争中、軍の命令で仏具や梵鐘が供出させられました。戦後、多くの寺で梵鐘は鋳造しなおされましたが、勝福寺では眼前に四日市別院の鐘楼があったこともあり、再び梵鐘を鋳造することはありませんでした。

そうした事情もあり、勝福寺は、四日市別院に協力する形で除夜の鐘を撞かせて頂いております。また、婦人会の有志が、渡辺麹屋さんが提供して下さった麹で造った「甘酒」を参詣された皆さんに振る舞っております。

修正会

修正会は本来、元旦の早朝に勤められるものですが、勝福寺では前夜、ご門徒の有志の方と共に四日市別院の除夜の鐘のお手伝いをしたこともあって、午後一時から修正会のお勤めを行っています。

お勤めを終えた後は、坊守が丹精込めて造ってくれたおせち料理を囲みながら、新しい一年の抱負などを語り合ったりして過ごすのが慣例となっています。

平成23年（2011年）雪の除夜の鐘

平成30年（2018年）

平成22年（2010年）山門から

平成30年（2018年）
参詣者へ甘酒の振るまい

平成22年（2010年）修正会

平成28年（2016年）みんなでおせち料理を囲んで

各法要の講師一覧

	法　要　名	期　間	講　　師　　名	参詣者
平成元年	報恩講	1989/1/25～28	細川静照先生	
	永代経春季彼岸会	1989/4/21～23	石黒明信先生	
	秋季彼岸会	1889/9/11～13	渋谷　円先生	141
平成2年	報恩講	1990/1/25～28	細川静照先生	
	永代経春季彼岸会	1990/4/23～25	石黒明信先生	
	秋季彼岸会	1990/9/7～9	三人の若手住職（氏名不明）	160
平成3年	報恩講	1991/1/25～27	松本梶丸先生	294
	永代経春季彼岸会	1991/4/20～22	石黒明信先生	151
	秋季彼岸会	199 1/9/25～27	谷口美恵子先生（25）平木正則先生（26）樋口正毅先生（2	212
平成4年	報恩講	1992/1/23～25	松本梶丸先生	308
	永代経春季彼岸会	1992/4/10～12	林暁宇先生	228
	秋季彼岸会		ナシ	
平成5年	報恩講	1993/1/25～28	松本梶丸先生	329
	春季彼岸会	1993/4/25～27	加藤清次先生	175
	秋季彼岸会	1993/9/16～17	藤原正遠先生、利枝先生	178
平成6年	報恩講	1994/1/23～25	鍵主良敬先生	
	春季彼岸会	1994/4/10～12	不明	
	秋季彼岸会	1994/9/17～18	不明	
平成7年	報恩講	1995/1/21～23	鍵主良敬先生	
	春季彼岸会	1995/4/21～22	不明	
	秋季彼岸会	1995/10/12～13	不明	
平成8年	報恩講	1996/1/20～22	鍵主良敬先生	210
	春季彼岸会	1996/4/21～22	藤原正遠先生、利枝先生	156
	秋季彼岸会	1996/10/12～13	林暁宇先生	167
平成9年	報恩講	1997/1/25～27	高岡孝之先生	
	春季彼岸会	1997/4/20～21	藤原正遠先生、利枝先生	
	御遠忌・本堂落慶	1997/10/18～19	松本梶丸先生（蓮如上人500回御遠忌・本堂落慶法要）	
平成10年	報恩講	1998/1/23～25	福島和人先生	241
	春季彼岸会	1998/4/12～13	藤原利枝先生	189
	秋季彼岸会	1998/10/1～2	林暁宇先生	173
平成11年	報恩講	1999/1/28～30	福島和人先生	233
	春季彼岸会	1999/4/14～15	藤原利枝先生	168
	秋季彼岸会	1999/10/6～7	林暁宇先生	174
平成12年	報恩講	2000/1/21～24	福島和人先生	238
	春季彼岸会	2000/4/14～15	河村とし子先生	223
	秋季彼岸会	2000/10/3～4	大石法夫先生	206
平成13年	報恩講	2001/1/26～28	千部良穂先生	240
	春季彼岸会	2001/4/15～16	亀岡邦生先生	155
	秋季彼岸会	2001/10/11～12	谷口美恵子先生	169
平成14年	報恩講	2002/1/25～27	五十嵐務先生、中本昌年先生	294
	春季彼岸会	2002/4/13～14	田畑正久先生、住職	231
	秋季彼岸会	2002/10/1～2	藤原利枝先生	247
平成15年	報恩講	2003/1/24～26	五十嵐務先生、中本昌年先生	273
	春季彼岸会	2003/4/26～27	谷田暁峯先生	197
	秋季彼岸会	2003/10/4～5	高雲昌美先生	175
平成16年	報恩講	2004/1/23～25	五十嵐務先生、中本昌年先生	298
	春季彼岸会	2004/4/10～11	牧野桂一先生	160
	秋季彼岸会	2004/10/6～7	高雲昌美先生	145

平成17年	報恩講	2005/1/21～23	酒井正知先生	288
	春季彼岸会	2005/4/10～11	張　偉(チャン・ウェイ)先生	146
	秋季彼岸会	2005/10/8～9	高雲昌美先生	154
平成18年	報恩講	2006/1/27～29	酒井正知先生、他	291
	春季彼岸会	2006/4/8～9	宮岳文隆先生	123
	秋季彼岸会	2006/10/7～8	渡辺愛子先生	171
平成19年	報恩講	2007/1/26～28	田畑正久先生、住職	308
	春季彼岸会	2007/4/7～8	宮岳文隆先生	137
	秋季彼岸会	2007/10/6～7	渡辺愛子先生	170
平成20年	報恩講	2008/1/25～27	高橋法信先生(26、27)、住職(25昼)、五十嵐先生(25夜)	331
	春季彼岸会	2008/4/11～12	宮岳文隆先生	134
	秋季彼岸会	2008/10/10～11	渡辺愛子先生	150
平成21年	報恩講	2009/1/23～25	高橋法信先生(24．25)住職(23)	254
	春季彼岸会	2009/4/10～11	谷田暁峯先生	143
	秋季彼岸会	2009/10/2～3	住職	164
平成22年	報恩講	2010/1/22～24	高橋法信先生(23．24)住職(22)	280
	春季彼岸会	2010/4/9～10	谷田暁峯先生	136
	秋季彼岸会	2010/10/1～2	住職・坊守	166
平成23年	報恩講	2011/1/28～30	佐野明弘先生(29、30)住職(28)	307
	春季彼岸会	2011/4/8～9	藤本愛吉先生	164
	秋季彼岸会	2011/10/7～8	住職・坊守	147
平成24年	報恩講	2012/1/20～22	佐野明弘先生(20、21)住職(20)	255
	春季彼岸会	2012/4/13～14	藤本愛吉先生	155
	秋季彼岸会	2012/10/5～6	住職・坊守	161
平成25年	報恩講	2013/1/18～20	佐野明弘先生(19、20)住職(18)	300
	春季彼岸会	2013/4/5～6	藤本愛吉先生	143
	秋季彼岸会	2013/10/8～9	住職・坊守	
平成26年	報恩講	2014/1/24～26	鍵主良敬先生(25、26)、住職(24)	270
	春季彼岸会	2014/4/4～5	國田法應先生	148
	秋季彼岸会	2014/10/3～4	住職・坊守	156
平成27年	報恩講	2015/1/23～25	鍵主良敬先生(24､25)、住職(23)	259
	春季彼岸会	2015/4/3～4	渋谷　円先生	117
	秋季彼岸会	2015/10/2～3	住職・坊守	136
平成28年	報恩講	2016/1/22～24	鍵主良敬先生(23、24)、住職(22)	247
	春季彼岸会	2016/3/25～26	川村妙慶先生（25）、住職・坊守（26）	165
	秋季彼岸会	2016/10/7～8	住職、坊守、藤谷信、村田風	142
平成29年	報恩講	2017/1/27～29	平野喜之先生（28､29）、住職（27日）	273
	春季彼岸会	2017/3/24～25	酒井浄圓先生(24)、村上由香思先生(25)	119
	秋季彼岸会	2017/9/29～30	住職、坊守、藤谷信、村田風	133
平成30年	報恩講	2018/1/26～28	平野喜之先生（27､28）、住職（26）	279
	春季彼岸会	2018/4/16～17	川村妙慶先生	127
	秋季彼岸会	2018/9/28～29	住職、坊守、藤谷信、藤谷風	112
平成31年	報恩講	2019.1/25～27	平野喜之先生（26，27）、住職(25)	228
	春季彼岸会	2019/4/7～8	川村妙慶先生	108
	秋季彼岸会	2019/9/27～28	住職、坊守	105